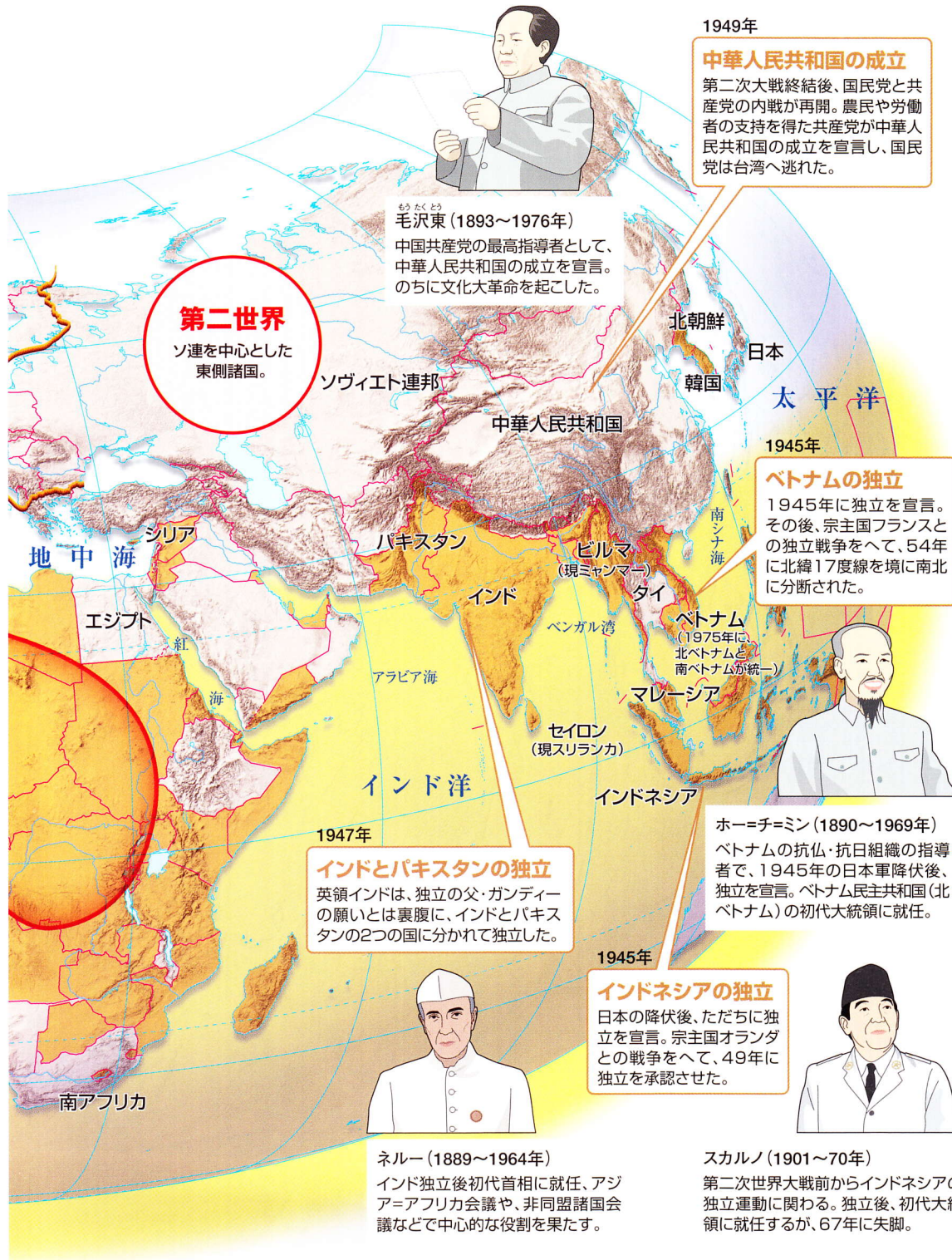


植民地の独立ラッシュで登場した第三の世界



第二次世界大戦後に独立を果たしたアジアやアフリカの国々は、東西冷戦のどちらの陣営にも属さない第三世界を形成した。



戦後相次いで独立を遂げたアジア・アフリカ諸国

第二次世界大戦が終結すると、列強による植民地支配体制は動揺をみせはじめた。とくに1940年代後半、民族主義運動を背景にアジア諸国が次々と独立を果たした。イギリスの支配下にあった南アジアで、インド、パキスタン、セイロン(現スリランカ)が分離独立したほか、大戦中日本軍が占領していた東南アジアでもベトナムやインドネシア、フィリピン、ビルマ(現ミャンマー)などが相次いで独立した。また、東アジアでは朝鮮半島が南北に分かれて国家を樹立したほか、戦後、国共内戦が再開していた中国では、農民や労働者の支持を得た共産党が49年に中華人民共和国の成立を宣言した。

一方、サハラ以南のアフリカ諸国では、57年にエンクルマに率いられたガーナの独立をきっかけに、60年に17カ国が独立し、「アフリカの年」とよばれた。63年に、これらの国々を中心としたアフリカ統一機構(OAU)。現在のアフリカ連合(AU)が誕生、アフリカ諸国の主権擁護や相互連帯の促進などを目ざした。

しかし、旧宗主国によって引かれた国境線を受け継いだ国々のなかには、権力闘争や民族対立などで内戦が続発したほか、旧宗主国に従属する経済構造が残



カストロ (1926年~)
キューバ革命を、チェ・ゲバラとともに指導。現在もキューバの最高権力者として国家評議会議長に就いている。

1959年

キューバ革命

カストロを中心とした革命勢力が、アメリカ資本に支えられたバティスタ政権を1959年に打倒。その後のラテンアメリカ諸国での反米運動に影響を与えた。

1970~73年

チリで社会主義政権誕生

アジェンデが大統領に選出され、社会主義政権が誕生。その政策は民衆に支持されたが、軍部のクーデタで倒された。

ラテンアメリカとアメリカ合衆国

ラテンアメリカ諸国の多くは、19世紀に独立を果たしていたが、経済的にはアメリカ合衆国に従属し、多くの国でアメリカが支援する独裁政権が続いていた。植民地時代から続く極端な貧富の格差を背景に「反米・民主化勢力 対 親米・独裁権力」という対立の構図が、ラテンアメリカの現代史を特徴づけている。

1945~1989年に独立した国

第一世界

資本主義陣営に属する西側先進国。

第三世界

東西両陣営に属さないアジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国を「第三世界」とよぶ。第二次世界大戦後の世界において、大国・先進国中心の世界秩序に異議申し立てを行う勢力となった。

1960年

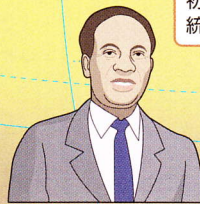
アフリカの年

1960年の1年間に、サハラ以南の17カ国が次々と独立し「アフリカの年」といわれた。

1957年

ガーナの独立

サハラ以南のアフリカで最初に独立を遂げた。初代大統領にエンクルマが就任。



エンクルマ (1909~72年)
ガーナの独立を指導して初代大統領に。以後、アフリカ諸国の独立を支援した。

**「第三世界」の由来
「第三身分」**

「第三世界」という呼称は、「第三身分」という言葉に由来する。フランス革命（P100参照）の立役者となった「第三身分」は、貴族・聖職者など特権階級に搾取される平民のことを指した。植民地から独立した「第三世界」も、政治的、経済的自立を目指す国々が連携を進め、国際社会で次第に影響力を強めていった。

る地域も多かった。
**東西冷戦下で生まれた
三つめの勢力**
1950年代になると、東西冷戦の対立構造が確立した。そしてその東西の陣営に属さない、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国を指して、第三世界とよぶようになった。実際にそれらの国のなかには、相互の連帯を強めるとともに、東西冷戦からの中立を保つ、第三の勢力形成の動きをみせる国もあった。
54年インドのネルー首相と中国の周恩来首相が会談し、領土と主権の相互尊重や内政不干渉などからなる平和5原則を発表、翌55年には29カ国が参加してアジア・アフリカ会議（バンドン会議）が開かれ、平和5原則を拡大した平和10原則が採択された。しかし、開催予定国の政情不安などで第2回会議は延期された。だが、このときの精神は非同盟主義に受け継がれ、61年に、ネルー首相、ユーゴスラビアのチトー大統領、エジプトのナセル大統領の提唱により25カ国が参加する非同盟諸国首脳会議が開かれた。